

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：12501  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2012～2014  
 課題番号：24500891  
 研究課題名(和文) ファザーリングの生活文化的探求からの保育課題に関する実証的研究 中国との比較検討  
  
 研究課題名(英文) Empirical research of problems related to child-rearing focusing on 'Fathering':  
 Comparison with Chinese 'Fathering'  
  
 研究代表者  
 伊藤 葉子 (ITO, Yoko)  
  
 千葉大学・教育学部・教授  
  
 研究者番号：30282437  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ファザーリングから現代の保育課題を構造的に捉えることのために、より相対化した分析のために中国との比較を行い、実証的な検討を進めた。

まず、就学前児をもつ父親を対象に、父親役割認識、子育ての知識・スキル、子育て関与実態とその影響要因について首都圏近郊で質問紙調査を実施した。次に、行政主導の子育て中の親への教育支援の実施状況に関して資料収集・実態調査を行った。さらに、学際的な研究交流のために、アジアの隣国である中国のファザーリングの現状と課題を共有するためのシンポジウムを開催した。以上の実績から、ファザーリングに関する生活文化的な探求と教育支援に関しての有益な知見を得た。

研究成果の概要(英文)：The research aimed to clarify the problems related to child-rearing focusing on 'Fathering' in Japanese modern society. In this research, the empirical method was used, comparing it with Chinese 'Fathering' to relatively analyze the issues of Japanese 'Fathering'.

First, a questionnaire was given to fathers who have children aged 5 or 6 years and live in metropolitan areas in Japan and China in order to examine their awareness of the roles of a father, acquired knowledge and skills for child-rearing, actual participation in child-rearing by fathers and related factors. Secondly we investigated 'Fathering' support promoted by local governments, using guidebooks for fathering which local governments have published. Lastly a symposium was held to discuss the current situation and subjects of 'Fathering', comparing Japanese with Chinese ones. As the above suggested, this research generated beneficial outcomes on how to support 'Fathering'.

研究分野：家庭科教育

キーワード：ファザーリング 中国 子育て支援 国際比較 子育て支援ガイドブック 地方公共団体 イクメン  
親になるための教育

## 1. 研究開始当初の背景

少子化の進展や虐待の増加等の保育・子育てをめぐる深刻な問題に直面しているなかで、ファザリングの重要性が唱えられ、ファザリングの研究は、現代の保育課題の構造化に有益であることが示され、ファザリングの実態と影響している要因を、生活文化的文脈から探り、現実的な改善をはかるための適切な教育支援を再考する必要性が唱えられている。また、ファザリングの国際比較は、生活文化的な相対化を可能にし、母子関係中心からの脱却を目指す日本の保育・子育てに対する未来志向的な知見を生むと論じられている

## 2. 研究の目的

生活科学における「保育・子育て」に関する探求は、親子や家族関係・ジェンダー・ワークライフバランス・保育に関する知識やスキルを学ぶ機会(教育)等の生活をめぐる複雑で多面的な諸相から研究展開できることに意義がある。そこで、本研究では、ファザリングという焦点から保育課題を構造的に捉えるために、就学前児の父親が有する父親役割認識・獲得している知識・スキル、子育て関与など、すなわちファザリングとその影響要因を生活文化的文脈から探り、教育支援を問い直すことで、現代の保育・子育てをめぐる課題に迫り、我が国の親になるための教育および子育て中の親への教育に関する未来志向的な知見を得ることを目的とする。この生活文化的な探求と教育支援の問い直しに際しては、より相対化した考察・分析のために中国との比較を行い、実証的な検討を進める。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究 1

本研究では、就学前児をもつ父親を対象にファザリングとその影響要因について首都圏近郊で質問紙調査を行う。一方で、中国では、日本の首都圏と相当する上海において、同様の質問紙調査を実施する。

### (2) 研究 2

教育支援に関して、行政主導の子育て中の親への教育支援の実施状況に関して資料収集・実態調査を行う。

### (3) 研究 3

学際的な研究交流および成果公表・還元のために、アジアの隣国である中国のファザリングの現状と課題を共有するためのシンポジウムを開催する

## 4. 研究成果

### (1) 研究 1

調査対象として、日本は東京都・千葉市・さいたま市に住み、附属幼稚園などに通う5歳児(年長で来年小学校に進学)の子どもをもつ父親 108 名で、中国は、上海市に住み、大学附属幼稚園または有名幼稚園に通う 5

歳児の父親 117 名である。時期は、2013 年 4 月～2014 年 3 月である。

父親役割認識については、日本は、「一家の家計を支える役割」を重要視しており、中国は「人の生き方を示す役割」を重要視しており、「知識や文化を伝える役割」を父親の重要な役割だと認識している。子育て環境については、日本は、専業主婦が多く、祖父母との同居は少なく、距離も遠い割合が高いが、中国は母親が常勤職をもっている割合が高く、ベビーシッターを利用している家庭が多い。子育て参加に関しては、日本の父親は、「おむつを替える」「食事を与える」「風呂に一緒に入る」「外遊びをする」は、参加率が高く、中国の父親は、「ミルクを与える」「看病をする」「絵本を読む」「子どもに与える食べ物を選んで買う」「子どもの洋服(ベビー用品)を選んで買う」「子どものおもちゃ・絵本等を選んで買う」は、参加率が高い。子育ての情報源については、日本は、妻からの情報をよく利用しており、中国は、その他の情報源も使っている(親戚・友人・専門書・雑誌)。特に、子育てに関する情報源として、インターネットをよく利用している。

以上のことから、母親も働いている割合の高い中国では、父親の子育てをめぐる課題も日本とは異なっている。日本と比較して、中国の父親は、しつけや教育に熱心であることが伺えた。

### (2) 研究 2

調査は、各市町村作成の父親を対象にした子育て情報誌や各市町村が開設している講座についておこなった。全県庁所在地 46 市(県庁所在地が政令都市である場合は、プラス 1 市)、各県から 1 町、5 村以上ある県からは 1 村を選び、全部で 122 市町村に郵送にて調査用紙を送り、子育て情報誌実物の送付を依頼した。そのうち回答があった 42 県庁所在地、16 市、32 町、3 村の 93 市町村(回収率: 76.2%)を対象とした。調査時期は、2012 年 11 月～2013 年 2 月である。

父親のための子育て情報誌は 2011 年以降に刊行されたものが多く、作成していたのは調査対象地域の 21.5%で、市が 31%と市以上の規模の地方自治体で多く作成している。情報誌の記載内容は、「育児の知識や方法」が最も多く、次は「配偶者に対するサポート」である。また、父親自身が書き込むことができる記述欄が多いのが特徴である。育児の知識や方法では、遊び方が最も多く書かれている。他に、沐浴の仕方、オムツの替え方などをイラストで示しながら、具体的に記述されている。「現役パパからのアドバイス」も多くの情報誌に掲載されていた。

父親講座については、調査対象地域の 67.7%の市町村で行っていた。県庁所在地では 2007～2009 年頃、他の市町村では少し遅れてから行われていた。開催頻度は年 1～2 回が最も多く、父親の仕事が休みである土曜日も開催

されていた。「子どもと一緒に活動」が最も多く、次は「学習会」で、講座や父子で遊ぶ活動をした後に、「父親同士の情報交換」の時間が取られることも多い。

結果を集約する。

・2001年から2010年までに、59.1%の市町村が子育てガイドブックを刊行し、毎年もしくは1年おきに改訂している。

・父親のための情報誌としては、「父親手帳」等が2011年以降に刊行されているが、その数は21.5%とまだ少ない。

・父親講座は、学習会や講演会など受動的な講座内容から、子どもと一緒に遊んだり、工作をしたり、父親同士の情報交換をしたり、父親参加型の講座に変化している。

情報誌の分析結果は、次の通りである。

・子育てガイドブックの中の母子の健康に関する内容については、新米パパやママなど両親に向けたメッセージとして描かれているが、母親への情報がより多く掲載されていた。

・子育て支援事業に関する内容は両親に向けて編集されてはいるが、母親が働きながら子育てをすることへの応援事業の内容が多い。

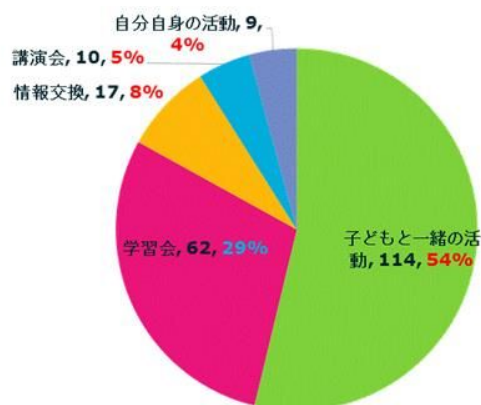
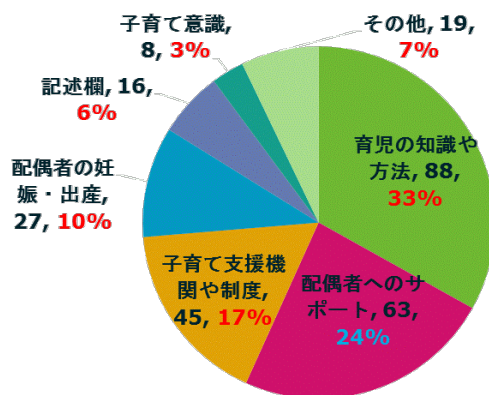
・一人親に対する子育て支援事業の内容としては、母親に対する経済的援助と就業支援に関する記述が多かった。

・父親手帳は、イラストを使いながら子育ての具体的な方法を示したり、子どもの成長の記録が記述できる欄を設けたり、子育てを実践できるような手立てを設けられている。

総じて、多くの地方公共団体が子育てガイドブックを刊行していること、さらにできるだけ多くの家庭に配布されようとしていることから、子育てガイドブックは、子育てに関する様々なサービスや制度・相談窓口など、地域の子育て支援事業について多くの親に周知する媒体としての意義が大きいと言える。ただし、両親に向けて編集されてはいるが、母親に関する情報に偏していることから、内容に関する検討が今後も必要と言えよう。とりわけ一人親への子育て支援事業は、母親同様、父親についても必要である。

父親についての子育て支援事業が、ここ数年、広く推進されていることは相当程度評価できることである。しかしながら、父親手帳を刊行している市町村が依然少ないことや、父親講座の回数、参加人数が必ずしも多くないことなどからわかるように、改善の余地は十分にある。

父親手帳については、使用した父親からの意見を取り入れ、実際の子育てに役立ち、楽しめる手帳にする必要がある。また、父親は遊びを通して子どもとかわかることが多い実態(13)からも、父親講座については、そのニーズに応えるとともに、子どもの年齢別の講座も必要であろう。さらに、普段子育てに関する不安や悩みを相談する相手がいない父親に対し、父親同士の子育てに関する情報交換の場として、父親講座の在り方を検討していくことも今後の課題といえよう。



### (3) 研究3

シンポジウムは、「中国の父親のほうがイクメン？～父親の子育て参加の日中比較」という題目で、2014年10月11日(土)14:00～16:30に、キャンパスイノベーションセンター東京1F国際会議室で行われた。趣旨は、「現在、ファザーリングは子育てをめぐる現状に風穴をあけるキーワードとなっている。日本では、『イクメン』という言葉も定着した。そこで、アジアの隣国である中国のファザーリングの現状と課題を共有することで、これからのファザーリング支援、さらに子育て支援のための方策を検討していくこと」であり、このシンポジウムで、豊富なデータや日中の研究者からの提言を示すことで、国際的・学際的な研究交流と活発な意見交換を実現することをねらいとした。プログラムと担当者を以下に示す。

#### パート1

データからとらえる日中の父親をめぐる現状

日本の地方公共団体の子育て支援

岡田みゆき

日中の父親の意識と子育て参加の課題

伊藤葉子

乳幼児の父親の子育ての現状(東アジア4都市比較)

高岡純子

#### パート2

日中の研究者からの提言

## 中国の父親の子育て参加の歴史と現状 楊寧

### 日本の父親をめぐる課題と展望

小崎恭弘

コメンテータ 榊原洋一

コーディネータ 一見真理子

パート1は、岡田みゆき氏から研究2の内容が、伊藤葉子氏から研究3の内容が報告され、ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室室長の高岡純子氏から、乳幼児の父親の子育ての現状として東アジア4都市比較調査(2009・2010年調査)の結果が報告された。東京と上海の父親の共通点としては、子どもに対する進学期待は高く、将来の子どもの教育費用や育児費用の負担が大きいと感じている点が指摘された。上海の父親に見られる特徴では、共働きの割合が高い中で、家事育児に関わる頻度が高く、平日の帰宅時間も早い傾向にあり、夫婦共同で日常的に子育てに参加している様子がみられ、東京の父親は帰宅時間が遅く、子どもとの関わりは平日よりも休日に多く持たれていることから、役割分担かつ非日常的なかかわり方であることが述べられた。

パート2として、華南師範大学教育科学院教授の楊寧氏から、中国の父親の子育て参加の歴史と現状が論じられた。毎日子どもと一緒にいる時間が1時間以上の父親は、83%、30分未満の父親は、8.5%であったという研究結果が報告された。また、中国の父親の子育て参加の特徴について、多くの父親は積極的に子育てに参加(日常生活の世話、行為の指導、感情の支持等)していること、子どもの学業向上への父親の参加が最も多いこと、若い父親ほど子どもとの相互作用を重んじているという研究成果が示された。ただし、父親の子育ての課題として、発展途上国としての中国は、都会と農村の格差、地域間の格差及び各民族間の格差が大きいため、中国の父親の子育て参加は複雑性と多様性を示していることや、関連研究はまだ初歩的なものであり、稀薄であることが挙げられた。次に、大阪教育大学教育学部准教授およびNPO法人ファザーリングジャパン顧問の小崎恭弘氏から、日本で実施されている父親を支える活動は、父親が親としての本来の力が発揮できるようにするための支援者のかかわり方や環境の整備などが指摘された。その上で、以下の4つの支援の必要性が述べられた。

1. 父親が子育てについての正しい知識や理解、価値観を得られるように父親をエンパワメントする。

2. 父親が母親とのパートナーシップについて理解し、夫婦ともに子育てができるようにする。

3. 父親が仕事や、生活、家庭、地域との良いかかわりができるように、ワークライフバランスを意識した生活者になれるようにする。

4. 父親自身が積極的に育児や家庭生活の主人公として暮らしていけるように、地域社会の環境に対して関わりやネットワークができるようにする。

最後に、父親が育児できる社会システムと同時に文化を作り上げること、父親たちがつながりを持ち、企業や社会の変化を意識的に起こさせる必要性が強調された。

コメンテータのお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授およびチャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長の榊原洋一氏からは、日中では、必要とされる要因が違うことについての整理が示された。中国では、祖父母に任せると甘やかされる・母親だけでは十分にできないから・人の生き方を伝えるのは父親だからなどが、日本では、母親の負担が大きいから・男女共同参画だから・男性のロールモデルだから・男性の方が得意な遊びがある・そもそも子育ては両親がおこなうもの・女性の就業率が上がった・父親自身の成長につながるから・欧米より父親の子育て参加が少ないからなどが挙げられた。また、父親の子育て参加を支援するためには、実際に、日本の子育て参加を阻んでいる要因を探る必要性が提示され、以下の①~の要因が示された。

勤務時間が長い

通勤時間が長い

子育て知識が少ない

子育てが好きではない

関心がない

子育ては母親がするものだと思っている

育児休業がとりにくい

日本の父親の子育て支援を考える上で、これらの阻害要因を整理する必要があることが提示された。

さらに、父親の子育てを促進することで誰にどのような効用があるのかを整理する必要があると述べた。「母親や父親にとっての効用」については、研究が進められているが、「会社や社会にとっての効用」に関して、明確なエビデンスを示すことが求められていること、「子どもにとっての効用」についても、極端なネグレクトに近い状況が、子どもの発達を阻害することを示す研究はあるが、その他の研究蓄積はないことが論じられた。さらに父親の成長につながるという主張についても、どのような成長につながるのか、子どもにとって、父親が子育てにコミットすることが、子どもの発達にどのような効用をもたらすのかの議論を進めていくべきであると結んだ。

コーディネータの一見真理子氏からは、会場からの意見のいくつかが紹介された。

\*日本の父親は忙しくて時間が短いが、密接なコミュニケーションをとるように努力しており、評価できる。

\*日本では母親が子育ての中心であることが問題視されているが、逆に中国では近年、

日本の母親の子育てには学ぶべきことが多いという説もある。

\*日本でも女性が働くことが当然になってもらわないと困る。

そのような考え方をする男性とでなければ結婚したくない。

また、コーディネータとして、今回のシンポジウムでの成果として、以下のように集約した。

\*日本では女性がM字型雇用と呼ばれるように出産と同時に仕事をやめるが、女性の子育ての能力を高く評価する中国の研究を踏まえると、女性の能力をどのように使うのがよいのかという問題になる。どのように男女の労働力・子育て時間を分配することが社会全体としていいのかという課題がある。

\*父親が子育てに参加するモチベーションの主要なものに、パートナーからの要請がある。産業構造や職場環境の変化については、今、取り組まれており、「イクボス」といって、従業員のワークライフバランスをとりながら、会社の業績を上げることを促進している。伝統的性別役割を根底にもつ日本文化のなかで、日本の父親も働き方と育児参加の両立に苦労している。

\*ワーキングマザーが増えているが、時間あたりの生産性は女性が高い。保育園に迎えに行くのは母親の役目である傾向が強いため、目的的に時間を使う。それが職場にいい影響を与える。女性が職場に入ることが、日本の職場の働き方を変えていく力をもっている。男性が育休をとれない理由は、前例がないからのような。ある職場では、一人の男性が育休をとった後、後に続く男性が多くなったことからわかる。

\*中国だけではなく、日本社会や家庭をめぐる状況も激動のなかにある。その変化に対応することが必要だと言える。問題だと思ふことには、若い人が声をあげて解決していくことが必要であろう。寿命が長くなり、人生の捉え方、女性と男性の関係性、働き方、強い生き方そのものを見直す時期にある。

\*若い人たちの意識が変わったと実感している。男女共同参画をめざす教育の効果が出ていると思う。

さらに、都市部に限っていえば、中国の方が育児参加時間の多さや意思決定面で日本よりもはるかに「イクメン」と言えること、しかしその背後にあるのは、たった一人の後継者を立派に育てなければならないという強烈なプレッシャーであることが、再確認されたと述べ、父親の子育ての日中で共通するあるいは異なった課題について、多角的な報告とディスカッションに、父親の子育て支援や保育の課題に関して、より理解が進んだことに関しての謝辞が述べられた。

以上のことから、研究1・2・3により、現代の保育・子育てをめぐる課題に迫り、我が国の親になるための教育および子育て中

の親への教育に関する未来志向的な知見を得ることができたと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計16件)

Mariko Ichimi Abumiya.(2015). New Trends in preschool Education and Childcare in Japan: Transition to a “Comprehensive Support System for Children and Child-rearing” Education in Japan, NIER English HP, National Institute of Educational Policy, 査読有, 1, 1-8.

伊藤葉子, 計良友美.(2015). 市町村発行のひとり親向けガイドブックの内容分析. 千葉大学教育学部研究紀要, 査読無, 63, 61-69.

一見真理子. (2014). 中国における教育格差 - 流動人口子女の教育問題を中心に. 季刊中国, 査読有, 118, 30-37.

Yoko Ito, Setsuko Nakayama.(2014). Education for Sustainable Development to Nature Sensibility and Creativity. International Journal of Development Education and Global Learning, 査読有, 6(2), 5-25.

Setsuko Nakayama, Jeffrey M Byford & Yoko Ito.(2014). Japanese and American high school students' awareness of poverty. International Journal of Home Economics, 査読有, 6(2), 227-242.

Satomi Izumi-Taylor, Yoko Ito, Chia Hui Lin, Yu-yuan Lee.(2014). Pre-service Teachers' Views of Children's and Adults' Play in Japan, Taiwan, and the USA. Research in Comparative and International Education, 査読有, 9(2), 213-226.

伊藤葉子, 中山節子.(2014). 教員養成におけるESD指向上のための教材開発: 小学校家庭科の授業づくり. 千葉大学教育学部研究紀要, 査読無, 62, 177-182.

岡田みゆき, 伊藤葉子, 一見真理子. (2014). 地方公共団体における父親の子育て支援. 日本家政学会誌, 査読有, 65(10), 576-597.

Yoko Ito, Mariko Ichimi.(2013). Fathering participation in early childhood education. The 65<sup>th</sup> OMEP World Conference Abstract Book, 査読有, 65, 148-149.

伊藤葉子. (2013). 家庭科の授業時間減少をめぐる課題. 日本家政学会誌, 査読無, 64(8), 251-253.

伊藤葉子. (2013). 授業研究と互いに育ち合う「家庭科教育研究」の追究. 日本家庭科教育学会誌, 査読無, 55(4), 215-226.

Yoko Ito, Satomi Izumi-Taylor.(2013). A comparative study of fathers' thoughts about fatherhood in the USA and Japan.

Early Child Development and Care, 査読有,183(11). 1689-1704.

一見真理子.(2013). 就学前教育の世界的潮流：人生の始まりが今、なぜ問われるのか。比較教育学研究, 査読有,46,194-197.

Yoko Ito, Satomi Izumi-Taylor.(2013).A cross-cultural Study of America, Chinese, Japanese and Swedish Early Childhood In-service and Pre-service Teachers' Perspectives of fathering. Research in Comparative and International Education, 査読有,8(1),87-101.

岡田みゆき, 土岐圭佑.(2012).大学生の食生活の実態とその関連要因.日本教科教育学会, 査読有,35(2),92-98.

岡野雅子, 伊藤葉子, 倉持清美, 金田利子.(2012).中・高生の家庭科における「幼児とのふれ合い体験」を含む保育学習の効果：幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連,日本家政学会誌, 査読有,63(4),611-622.

〔学会発表〕(計5件)

Yoko Ito. (2014,7,20). Childcare and Pre-parenting Educational Program in Japan. IFHE Council 2014, London, Canada.

Yoko Ito, Ikuyo Kamano, Setsuko Nakayama. (2013,7,16). ESD Curriculum focusing on caring education for K-12, 17<sup>th</sup> Biennial International Congress of ARAHE, Singapore.

Yoko Ito, Miyuki Okada, Mariko Ichimi. (2013,7,15). Local governments' support for fathering in Japan. 17<sup>th</sup> Biennial International Congress of ARAHE, Singapore.

Midori Otake, Michio Miyano, Kei sasai, Kuniko Sugiyama, Yoko Ito, Noriko Arai. (2012,7,18). What did we learn from the 3-11 disaster and how do we need to reconsider a sustainable life? International Federation for Home Economics the 22th World Congress. Melbourne, Australia.

一見真理子.(2012,6,2). シンポジウム：教育と福祉のコラボレーション. 第13回日本子ども家庭福祉学会, 大阪府立大学.

〔図書〕(計1件)

Midori Otake, Michio Miyano, Kei sasai, Kuniko Sugiyama, Yoko Ito, Noriko Arai. (2012). Creative Home Economics Futures: The next100years. Australian Academics press. 241p.

千葉大学・教育学部・教授  
研究者番号：30282437

(2)研究分担者

鑑屋 真理子 (一見 真理子) (ICHIMI ABUMIYA Mariko)

国立教育政策研究所・国際研究・協力部・研究員

研究者番号：20249907

岡田 みゆき (OKADA Miyuki)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90325308

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 葉子 (ITO Yoko)